

長野県長野市旧中条村でのケーススタディーの実施報告
 (詳細版 第5回・第6回)

<第5回>

■会議名 いおりのみらいワークショップ

■日 時 2020年1月26日(日) 13時30分～16時30分

■場 所 伊折区太田公民館

■出席者 地区内外の一般参加者：20名

コーディネーター：林准教授(金沢大学)

事務局

国土交通省：栗林課長補佐、稲垣専門調査官、山本専門調査官、谷垣専門調査官、尾崎係長

長野市中条支所：想田支所長、中条地区住民自治協議会：大日方事務局長、黒岩氏

KRC：小林

オブザーバー

長野農業改良普及センター

報道：4名

■次 第

1 開 会

2 主催者あいさつ

3 これまでの経過・概要説明

4 本日の趣旨・目的と進め方

5 ワークショップ

(1) 自己紹介・役割決め

(2) グループ討議(計画検討)

— 休 憩 —

(3) 計画案の発表

6 意見交換

7 次回の案内その他

8 閉 会



■会議概要（会議の主な記録）

あいさつ

<主催者>

- 伊折区でのワークショップは今回が5回目で、前回まではこの地区の土地利用をどうしていくかということで色分けをしながら計画をつくってきたが、今回はその色分けした土地についてどのように取り組んでいくかを具体的に検討していきたいと思っている。
- 前回のワークショップでも、地区外に出ている通い耕作に来ている方や、地域おこし協力隊の方など伊折区に関わる方々に広く集まっていたほうがよいという意見があったので、今回はそうした方にもお声がけして参加していただいた。また県の方にも来ていただき、前回までとは違うメンバーで行うワークショップである。仕切り直しの今回は、やり方も工夫をして始めたいと思っている。これまでの振り返りも含め、今回のワークショップのやり方はまたお話しさせていただく。

これまでの経過・概要説明

スライドと資料でこれまでの経過及び概要を説明。

本日の趣旨・目的と進め方

- 10年後の計画はできたが、実際にどこで誰がどのようにこの計画に基づいてやっていくというところはまだ議論できていないので、今回から2回にかけて黄色や青色で色付けした土地（黄色：新たな方法で管理する土地、青色：従来どおりの方法で管理する土地）を中心に、それぞれの土地の場所で具体的にどのような取り組みをしたらよいかというアイデアを話し合っ班ごとにまとめていくのが、今日のワークショップ。
- そのときに実際の取り組みのアイデアとそれをやっていくにあたっては、どのようにすればうまくいくか、誰が中心になればうまくやっていくか、その取り組みをやっていくには何が必要なのかも含めて議論していただきたい。
- 今回のワークショップは、アイデアをたくさん出すというより、一つでもよいので具体的なアイデアを出してほしい。それを実際にやっていくにはどのような課題があるのか、どのようにやればうまくいくのかということをしっかり議論していただき、多くても3つ、4つ程度でよいので、具体的なアイデアを、課題を含めて話し合っていただきたい。各班で3つ、4つ出していれば、内容が被らなければ全部の班を合わせて10個くらいアイデアになる。
- 次回はそれらのアイデアをまとめて、皆さんで各アイデアに対する具体的な課題や、どのように取り組んでいくのかを議論していただきたい。これで地域づくりの行動計画を2月までに具体化してまとめていこうというワークショップである
- 若手の方との連携や交流の場として、地域おこし協力隊のような地域に関わる方や、地区外に住まわれている方、長野市から通い耕作で来られている方など、様々な方に声がけして来ていただいているので、これまで考えてきたことについても改めてご意見をもらいながら、新たなメンバーを含めてどのように取り組んでいくのがよいか議論いただきたい。
- 新たなメンバーも加わり、第1回から連続で参加いただいている方は4回目のワークショップにもなるので、今回からはグループ討議の内容の発表は、各班の参加者の方に発表をお願いしたい。
- 10年後、15年後にこの地区をどうしたいのかを明確にしたうえで、そのために何が必要なのかをリアルに議論していただくのが一つのポイントになる。

グループ討議の結果（計画案）の発表

< A班 >

○前回までは棚田を守っていこうという方向性でやっていたが、これを必ず守っていかないといけないというとすごくプレッシャーがあつてきつい。私は移住者なのでこれを守っていかないといけないと思うと逃げ出したくなるような感じがあるので、今回はそうではなく“楽しくここで暮らす”にはどうしたらよいかという方向性で話し合った。

○それには、少しでも農業に関心のある方を如何に呼び込むか。その人たちが農業をやりたいというときに、例えば田んぼをやりたいときに何が障害になるかというと機械や知識の問題があるので、どのようにその問題を乗り越えていくのか。棚田オーナー制度は、以前にやったオーナー制度ではただお米を送ってもらっただけだったが、今回はしっかりと田んぼと向き合ってもらい、難しいかもしれないが草刈りまでやるような熱量の高い人に来ていただけるような方策を考えて呼び込みたいという話になった。

○お米だけでなく、田んぼで作れる豆だったり、藍（タデ科の一年草）だったり。藍は湿ったところのほうがよいらしいので、藍を育てて、藍染めに関心のある人たちも呼び込めるとよい。

○キャッチコピーも色々と考えたが、どうしても楽しくやらないと、日々の生活が苦しいと楽しくないので、如何に楽しく続けていけるかということで「楽しく続ける伊折の暮らし」とした。



計画名称（地域づくりのキャッチコピー）

『～楽しく続ける伊折の暮らし～』

実践内容	場所	実践する上での検討課題 (実施時期、実施主体、連携先ほか)
<ul style="list-style-type: none"> ・集落内で機械の貸し借りをして、1年お試し制度 ・地域内でやってみたい人が耕作をチャレンジする仕組み ・藍染め用の藍 ・野沢菜やソバを植えるなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・栃倉の棚田 ・栃倉の棚田 	<ul style="list-style-type: none"> ・米はおいしいはず ・田んぼをやりたいがノウハウがない ・機械を買うコストが出せない ・直接支払いをやり始める予定 ・地域内で機械やノウハウを共有して、新しい人にチャレンジしてもらう仕組み ・有機米で高い値段で売る
<ul style="list-style-type: none"> ・棚田オーナー制度 ・ヤギの放牧 		
その他 <ul style="list-style-type: none"> ・必ず守らないといけないという発想は難しい ・住んでいる人を守っていくのが大切 ・1人でできる範囲は限られている ・1人の人がより多くの農地をやる方向性はづらい ・移住者などは楽しさを求めて移住してくる ・色々な特技を持った人に住んでもらいたい ・人が減っても少ない人数で守るという発想なNG ・最終的に守れなくても仕方がない 		

A班のワークシート上の記載意見（地域づくり行動計画案）

<B班>

○枋倉と田沢沖の棚田2か所をどうするかを主に考えた。今の現実として、ここに住む親たちが80歳代に入り、その子どもたちが通いながら米を作っているという実態がある。このままだと田んぼを続けていくのが難しいという現実と直面している。田沢沖もそうだが、特に枋倉のほうがそういった現状だろうと思う。そんななかでどうしていくかという話をたくさんした。



○1つは、今できることとして、まず共同作業から始めてはどうだろうということである。最も手がかかるのが田植えの時期と稲刈りの時期なので、この時期に共同作業ができないかというところから始めて、徐々に5年後くらいまでの間に、機械化や電気柵などの整備を進め、子どもたちに耕作の必要性などを理解してもらい、手伝ってもらう。こういったことを進めながら、最終的に5年後くらいに全部を集落営農というかたちに持ち込むのが理想的だと思う。持ち主の意向などの色々な問題もあるが、頑張ればできるかもしれないという話になった。

○もう1つは、紙漉きをやっている方がいて、コウゾ（クワ科の低木）の生産をとという話もあり、コウゾを作ったらその方を買ってもらえるのではないかという話もあった。荒廃地対策としてコウゾという産物も生み出せるのではないかという話になった。

○サブタイトルとしては、「景観を守る」というものを考えた。いまの景観は作物を作っているから守れているものであり、それをやめるとこの景観はなくなってしまう。そのような意味で“景観というのが一番大事”ではないかということで、仮のキャッチコピーとして付けた。

計画名称（地域づくりのキャッチコピー）

『～景観を守る～』

実践内容	場所	実践する上での検討課題 (実施時期、実施主体、連携先ほか)
<ul style="list-style-type: none"> コウゾを植えていく 紙すき製品を作っていく 	<ul style="list-style-type: none"> 地区内の耕作放棄地 	今 <ul style="list-style-type: none"> すでにコウゾの生えている土地の整備 紙漉きをやっている方に、みんなの荒れているコウゾを整備して販売 耕作放棄地にコウゾを植える
<ul style="list-style-type: none"> 最低限、耕地として活かす 集落営農 	<ul style="list-style-type: none"> 田沢尻、枋倉の棚田 おいしいコメがとれて条件のよい田 	今 <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちへ耕作の必要性を理解してもらう 集落共同、一体で守ろうという一体感 共同組織の設立に向け準備 来年度から <ul style="list-style-type: none"> 栽培方法の統一（作業と販売のため） 共同作業を開始 今から5年まで <ul style="list-style-type: none"> 子ども世代に手伝ってもらう、引き入れ 所有者の意思確認 コンバインの集約化に向けて共同購入、外部からの若手の引き入れ 鳥獣害対策（電柵）を共同で購入 5年目 <ul style="list-style-type: none"> 集落営農化 5年以内には集約化 5年目安に販路づくり まずは何人かで共同化

B班のワークシート上の記載意見（地域づくり行動計画案）

<C班>

～栃倉の棚田を守るために。人を呼ぶ！！～

- キャッチコピーは「栃倉の棚田を守るために。人を呼ぶ！！」ということで、10年後には人が必ず少なくなっていくというなかで、人を呼んで後継者をつくっていききたいというものである。
- 皆さんからたくさんの意見が出た。私も父親の代わりに田んぼをやっているが、田んぼの作り方など理解していなかったの、一から勉強しながら進めている。自分の代で終わりかなとも考えるが、そうしたなかで今後後継者をつくるためには募集をしていく仕組みは必要になる。その対象は地区内と地区外両方ある。いまは空き家バンクの取り組みも進みつつあるという話を伺ったので、そうした情報と一緒に、耕作地の情報も整理して出してはどうかという話が出た。そうすると、自治協議会や市役所の支援の中で仕組みを動かしていくことができるのではないかという意見が出た。C班に入っていたいただいていた地域おこし協力隊の方からのお話で、その際の重要な視点は、人を外から呼ぶ際には「人手が足りないから手伝いをしてほしい」という募集ではなく、「食っていける」耕作地の面積を確保して、それを地域として合意して募集をかけることだと。それが必要ではないかという意見があった。
- もう1つは、耕作者をつくるということに加えて、生業として成り立っていくために米などを買い支える人、食べてもらえる人をつくっていくことが必要ではないかということ。今は食育などに興味がある都会の方も多いので、外部でイベント開催や、既に田植えや収穫の体験会は実施しているので、それらの取り組みを推進してはどうかという話があった。
- また、ブランド力も強化したほうがよいという話があり、はぜかけ米の景観や、サンショウウオの棲むきれいな水など、何を（何で）ブランド化していくかということ、皆で話し合う場が必要という話も出た。先ほどのまとまった耕作地の確保の件も含めて、何を強みにしていくかということ、を棚田の関係者がまとまって話し合い、栃倉の棚田にフォーカスして議論する場が必要ではないかということである。
- 他にも、鳥獣対策として電柵を個人ではなく地域でまとめて張るような話し合いをして、効率化していくことも必要なのではないかという意見もあった。
- 私も田んぼを始めて間もなく、仕事も続けながらやっていくということで、5年くらいはあまり伊折のことや棚田全体のことはわからないと思う。65歳くらいになれば少しは皆でやっていくという考えもわかるかと思うが、いまは日々の生活に一生懸命でなかなかできない。私も伊折で生まれ育ったのでこの景観は守っていききたい、協力してやっていききたいと思っている。



計画名称（地域づくりのキャッチコピー）『**栃倉の棚田を守るために。人を呼ぶ！！**』

実践内容	場所	実践する上での検討課題 (実施時期、実施主体、連携先ほか)
耕作者をつくる ・(栃倉) 耕作者を募集する仕組み ①地域内の耕作意思のある者の確認 ②地域外から募集 ・村営(市営)住宅 ex)小川村 (賃貸) 空き家バンク+耕作地情報		・問い合わせ「多」、よい空き家が少ない、意思確認 ・機械化(コンバイン)、まとめて耕作できる必用 ・外部からきてもらうには、お手伝いではなく「食 っていける」耕作地の合意 ← 主体 自治協(地域のとりまとめ)+市役所(支援)
買い支える人をつくる ・食べる側、応援者をつくる ・外部イベント「食育」 ・(20人)/年 田んぼの会(田植え、収穫) ・ブランド米化、販路		誰が? ・体験⇔中間の(日常)管理 強み、ブランド化、有機 ex) AI化、効率化、鳴子(10年間のイメージ、応援 者) ・強み-安心(顔が見える) ・ブランド化-何をブランドにするのか サンショウウオ?水? ・有機-機械化⇔はぜかけ米ブランド? 必要 ↑ ・棚田の関係者が一つにまとまる話し合いの場
鳥獣対策 ・鳥獣、電柵統合(一体的に) ・管理の集まり、話し合い(直接支払いの 話し合いの中で)		

C班のワークシート上の記載意見(地域づくり行動計画案)

意見交換

<A班>

- 人が減ってきてても必ず棚田を守ることになると、残された人達でもっと頑張って維持するとい
 うことになるので、残された人にとっては辛いし、続かないだろうと思うので、やはり1人でも
 多くの新しい耕作者を増やしていかないと守っていくことはできない。そこでどういった人が新し
 く栃倉の棚田でやってくれるかということを議論したが、たまたま地域内の方が、少し興味がある
 という話であった。興味があるという方はこんなに身近な地域内でもいるので、新しく移住してく
 る人の前に、まずは地域内で農業に関心を持っている人が農業を全く知らない状況からチャレンジ
 してみることへの支援を少しでもできれば、まずは身内からでも新しく耕作してくれる方を増やせ
 るのではないかということを色々と議論した。
- そのなかで課題になっているのが、一度も田んぼをやったことがないので、まずどうやって田んぼ
 をやっていけばよいか分からないということや、機械を買い揃えなければいけないというところ
 かなりハードルがあるということである。そこで、耕作のノウハウがなく機械の初期投資もできな
 い状態でも1年お試しでやってみたいという方を地域内で支援し、1年後にもっとたくさんやっ
 てみたいとなった段階で機械を買い揃えてもらう、あるいは集落内で共有して買うといったようなこ
 とをすれば、外部からの人に頼らなくとも身内の中から1人でも耕作者を増やせるのではないかと
 いうことである。こういったことを考えていくのは、来年からでも少しずつやっていけるのではな
 いかと思う。かなり現実的で実現性もあるのでぜひやっていただければよいと思う。私自身も農
 業のノウハウがなく、機械の共有やレンタルについてのノウハウに関する知見もないが、そういっ

たことは実際に農業をしている地域内の皆さんのほうがノウハウを持っているかと思うので、ぜひ地域のなかで、あるいは次回ワークショップでも議論していただき、地域内にいま住んでいる方もしくは移住してきた方で関心のある方が、まずは農業にチャレンジしてみるにはどうやって進めていくかということを議論し、それが実現すれば第一歩になるのではないかと思います。

○その後の棚田オーナー制度は身内だけでは十分に確保することができないということになれば外部の人を集める必要はあるかと思うが、そこは次のチャレンジであると思っているので、議論の中心としては、まず集落内で関心のある方がチャレンジしてみる仕組みを引き続き議論していきたいということになった。

○A班で議論をしているなかでは具体的に来年からやってみようというところまではいけなかったもので、本日参加している皆さんのなかで、こうすればやっていけるのではないかという考えがあれば、ぜひこの場で意見をいただければ有意義なのではないかと思う。

○オーナー制度の話も出たが、私は長野市内に住んでいるが、別の場所でリンゴのオーナー制度で年に5回程耕作をしており、有意義な時間を過ごさせていただいている。町場に住んでいる方にもそういう関心のある方は結構いらっしゃるのではないかと感じているが、長野市街にお住まいで、実際に耕作までやってみたいという声は聞かないか。

→聞かない。わざわざこんな山に来てまでと私は思ってしまう。

○やはり田植えと収穫だけに来るような棚田オーナーは地域の負担が増えるだけなので意味がない。定期的な草刈りも含めて田んぼを自分たちで維持してくれるオーナーではないと意味がないので、やるのであれば、そういったオーナー制度にしていきたいという意見はあった。

○そうなるともっと幅広く、長野市街だけでなく都会のほうにもニーズはありそうだが、オーナーとしてなら年にどれくらいの頻度で来てくれれば人手になり得るか。果樹よりも田んぼのほうがやりやすいという話も伺っているが。

→棚田オーナーというよりも、興味のある方がやってみたいというときに、機械がない場合に貸し出すことができるとか、ここの農地でやってみとか、あとはどういった形で管理していくかということを地域の中で支援して田んぼをできるように育てていくことができればよい。

○新しく募集をかけていくという考えは。

→新しく人が関わってくるとすれば、純粋に農業をやりたいという観点と地域づくりに貢献したいという観点の両方を持っている方が来てくれるのだと思う。具体的に、10年後にどれくらい人手が足りなくて、何人くらいいれば足りるところがあると新しい人も来やすくなると思う。例えば1,000人足りないということであると、自分が入っても全然足りないなどとなるが、10人足りないと言われれば、10人の中の1人かとなると思う。議論をしていて、人が足りないから呼べばよいという意見はあったが、何人足りないという具体的な数字までイメージができなかった。もしかすると、そこが固まると関わる側が関わりたくなるのではないかと思う。オーナーも一緒に、棚田オーナーが何人いると残したい田んぼが守れるかというイメージがあるかないのでは違うと思う。オーナーは100人もいないと思うがどうか。農業をやっている方の感覚として、食べ手として何人足りないのか、管理要員として何人足りないのかというイメージを聞いてみたいと思った。

- B班の議論の中でも、具体的に10年後にどれくらい耕作者がいなくなるのかをまず調べたほうがよいという意見もあった。図上には10年後に耕作者が85歳以上になる農地をざっくりと示したが、場所が栃倉の棚田にフォーカスされてくるのであれば、もう少し細かくどれくらい足りないのかというところを調べていく必要はある。それ以前に、オーナーとして田植えと収穫だけ楽しんで終わりということだけでなく、地元にとっても人手になり楽しんでやることのできる仕組みができるとよい。そこに何人人手が必要かという数字的なところまで踏み込めるとよいのかなというのはある。

<B班>

- B班では最初の段階で10年後になったらどうなるのかという現実を見つめた議論ができたと思っている。あと10年くらいはここにいる皆さんが作業をそれなりにできるが、10年後はかなり厳しくなるのではないかとという前提で、一つずつ着実にやれることを考えることができた。
 - 自分の子ども世代にこの場所を耕作して行ってほしいという気持ちをまず分かってもらうなど少しでも耕作に興味を持ってもらえる方がいないか探すことは、今すぐにでも動けることだということが意見の中で出てきていた。そういった取り組みの結果として、A班のような方が出てくる可能性が一つある。
 - 最終的に10年後には今いるメンバーでやっていくことが難しくなる前提で、すぐには難しいので最終的には集落営農になるのが一番よいということを見据えながら、いま一つずつできることを考えたときに、個々で作業をしているものを少しでも共同でできる部分があるのならば、個々の手間が減るのではないか。通いで来ている方にとっても、負担が減る部分のあるのではないか。この景観を一日でも長く残すためにやれることを来年度からでもすぐにやれるのではないかとという話しをできたのがとても良かった。その結果によってA班の話にリンクするようになるのではないかと思う。
 - 特に景観を守るという話が最初に出た。水田としてやっている棚田の部分、水田でなくても野菜を作るにしても、農地として残していくことに、ここで生きていく意味があるというのは、皆さんが統一的に思っているところだと思った。そのために着実にやっていくこと、共同作業を開始することは来年度からできるという話があったので、始めていただくのではないかと思った。
 - コウゾについては取組をされている方がどのようにやっていかれたいかこともあるが、可能性として耕作放棄地を少しでも減らせるきっかけになるとか、この地域に新しい価値を生み出せる可能性が、地域に新たに入って来られた方によって生まれてくるという明るい未来も見えた。
 - 具体的に集落営農という話もあり、栃倉では来年度から中山間直払い(中山間地域等直接支払制度)を復活されるということである。共同でやっていくなかで色々なアイデアや課題もある。A班のほうでも電柵の話もあったと思うが、今まで個々にやっていた取り組みを共同化して農業をやるスタンスに少し足を踏み入れていかなければいけないという流れが全体的にはあるのかと思う。B班の方で、それについて何か質問、意見、補足があるか。
- 集落営農という形をとるにしても、誰が担うのかが大きな問題である。田んぼを作ることに限定すれば、田植えと稲刈りの時期に一番手がかかる。この部分にある程度の共同できる作業があれば、取り掛かりになるのではないか。
- あとは有害鳥獣防除の電気柵の設置とか、コンバインを買う(導入する)ことを共同で検討すれば、ある程度の可能性はあるのではないか。これについては所有者の意向や課題のあるだろうが、

その課題をクリアできれば、その方向にもっていけるのではないかという、一つの希望はある。

○共同作業も細分化して絞り込めそうだ。課題も色々とあるが一つの方向性がまとまれば、解決に向けて着手していけるのではないか。

○B班では特徴として紙すきの話もあったが、これについて紙すきをやっている方が思いを描いている補足みたいなものはあるか。地域の材料を使って作品を作りたいと思われているか。そのことも一つの種として発展できればよいと思う。また紙されている方の取り組みを皆さんに知っていただき、共有していければと思う。

○この地域では自家消費のために米を作っている方が多い。共同で土地をどのように管理するかという前に、収穫した米などをどうしていくか、土地所有者はどう思っているのか。共同で一つの法人にして全ての田んぼをやるとすると、収穫した米なりの利益をどうするのか。分配するのか、法人の利益にするのか、ぜひ伺いたい。

→それは一番議論になった部分である。特に栃倉に関しては、自家消費の方が多いだろう。現在販売されている量はそんなに多くない。高齢になり、作れなくなってきた方も出てきている。それならば集落営農をしようという発想である。逆に言うと、今までの地主が客になる可能性があるので、その方には優先的に買っていただく方向が有望だと思う。たぶん生産量の大部分がはけると思う。

○B班では最終的にはそういう話になっているが、移住者としては、今日参加されているような方が来てくれることが理想で大前提である。そういう方を呼んでこようというところからスタートするが、私は両親が元気なので通いで米作りをしている。東京に行っている大学生の娘も稲刈りのときには呼んで、毎年おいしい米と一緒に作ることを意識させている。ただ近所でも農業は一切やらない、田畑を老人夫婦が作っていても一切手伝わらないという若い人たちもいる。その子どもたちは農業に全く興味がない。今日来ている人たちは意識の高い人たちなのでこういう話になるが、現実的には誰がやるのかといったときに、外から来てくれる人に頼らないと10年後以降はおそらく作るのが誰もいない状況になるだろう。質問があったように色々な問題、課題があると思う。共同作業をスタートするというのも親戚と一緒にやって元気が出たり、電気柵は違う人とやったり、集まってやることは非常によいことであるが、赤の他人とやったときに機械をどのように使うかという課題もたくさんあるが、とりあえず誰がやっていくか、どうすればよいかを皆で考えた。自治協の方とか支所の方とか、行政などに頼るしかないというところから議論はスタートしている。

○今日は県の方、市の方、自治協の方も来ているので、取り組みの連携を深めていくということも趣旨の一つであるので色々なお知恵をいただきたい。

→空き家の関係で、非常に期待を持たれている方（移住者）は空き家を中条で購入されたということで来ていただいている。中条には空き家が400軒くらいあるが、すごく良い財産だと思っている。去年の10月から「集落再熟プロジェクト」という空き家、移住や定住のプロジェクトを始めた。この集落はまだ元気があるが、電気が消えていくと集落に元気がなくなっていくので、空き家に1つでも2つでも電気が灯ると集落全体が元気になっていくということもある。特に補助金等はない。地区の皆さんにご協力をいただき、譲ってもよい空き家、貸してもよい空き家の情報があれば自治協にある事務局で集約して、希望者に紹介ができるような物件をもちたいと思っている。なかには

訳のわからない人に住まれては困るという方もいるので、地域の方に関わっていただき、色々な話をしたりお手伝いをしたりしながら住んでいただきたい。家だけではなく、空いている農地も紹介をすれば住みたい人は都会にはいるということなので、期待をもってプロジェクトを進めていきたい。伊折区に限った話ではないが、ご紹介とお願いをしたい。

○長野農業改善普及センターから何かおありか。

→市のほうからも話は色々伺っているが、長野県の農業改良普及センターとしても担い手の確保が一番の重要課題となっているので、対応も色々やっている。この場所にも土地があり、家があり、農業をやっている魅力を発信して、都会も含めた農業をやりたいという人をできるだけ呼びたいということで取り組んでいきたいので、ご協力をお願いしたい。

○（農水省担当者[元国土交通省担当者]より情報提供）昨年、棚田地域振興法ができて、指定地域に指定されると支援が受けられることになっている。この法律のポイントは、棚田では空き家や観光という話があるなかで、農水省ではない世界で棚田地域においてできることが色々多い。どのような事業があって、どのようなものが使えるかというところを一元的に支援する「棚田地域振興コンシェルジュ」という人が、指定棚田地域について色々な助言をし、地域に指定されると支援がかさ上げされたり、財政支援もされたりする。中山間直払いを再興したという話も聞いたので、指定棚田地域になるようにチャレンジされてはどうか。

○よい情報提供をしていただいた。国、県、市には色々な制度やメニューがあるが、あまり使われていないというものもたくさんあると思う。棚田コンシェルジュのような制度もぜひ活用いただければ、地域のやりたいことの実現の可能性も広がってくるだろう。今日はほかにも、地域外で、七二会地区の自治協からもご参加いただいているので、一言いただきたい。

→中条が長野市と合併して10年、隣の七二会は約50年強経つ。このワークショップは市民新聞に載っていて、このことは日本中のどこでも抱えている問題であり、その先駆的なことをしているのだと思い、興味深く思い参加させていただいた。大変勉強になった。

長野市に合併をしてしまったために、市に頼る意識が非常に強くなってしまった。中条村や小川村のように自分たちの地域を、自分たちで何とかしていくという意識の人たちが七二会よりも多くいらっしゃるのではないか。今日もこれだけ人が集まっているのも、七二会ではこんなに人数は集まらないので驚いた。

○C班で、地域おこし協力隊の方に何かご意見をいただきたい。

→昨年6月から赴任し、メインの仕事は栗林でリンゴの栽培をしている。3年後に独立をしてリンゴとブドウの栽培で食べていきたいと思っている。色々な話が出たなかで、10年後、20年後を見据えていくと、人はやはり人がいないと始まっていかないので人を呼ぶにはどうしたらよいか。告知という話もあったが、私の感覚からすると東京とかの関東近県に住んでいる人の中には、こういうところで生活をしたい人は少なくはないと思っている。なぜ人が来ないかというと、食べていけるかどうかが大きい。来たいが生活ができないという理想と現実の差が大きい。ここで食べていくことは容易ではないと思う。子どもがいてこれから教育費がかかっていくことを考えると、食べていけるか、子どもを一人前に育てていけるかどうかの環境があるかどうか。それがなくて、外から人

が来てほしいというのは言葉が過ぎるかもしれないが、犠牲になってほしいということと同じだと思ふし、無責任だと思ふ。一方で、必ずこれで食っていけるというところまではする必要はない。それは本人が考えることで、過保護だと思ふ。ただ、ある程度協力はするとか、今までの経験値の中からアドバイスするとか、下地をつくるとか、一反当たりはどのくらいの儲かりになるのか、どのくらいの経費がかかるのかという数値の話を煮詰めて提供していき、これならできるというビジョンを見せていけば、来る人はいると思ふ。一人来てうまくいったら人の連鎖につながる。いまの世の中は口コミの力がとても大きく、悪い口コミが広がっていくと人は来なくなる。一番は食っていく仕組みを地区としてどのように考えていくのかであると思ふ。

○今日は新しく色々な方に参加していただき、各班での議論が活性化できたと思ふ。次回もご参加いただけるようお願いしたい。

全体を通じてコーディネーターの林先生からの感想

○話としては完全にまとまった感じなので、これ以上私
が何か言うことはないが、少し感想みたいなものを申
上げたい。

○今日のワークショップはかなり特殊なものに入ると
思っている。第1回目からそうであるが10年後、10
年という長いスケールを意識してやるワークショッ
プは珍しいのではないかと。正直これは心が折れる作業
だったのではないかと。高度成長期みたいな明るい10
年であれば楽しいが、いま、非常に厳しい状況の中で



10年を考えることは心が折れることがあったのではないかと。各班とも果敢にチャレンジしている様子が見られて感動した。やはり随所に長期を意識した様子が見られたのがとても良かったと思ふ。

例えばA班では「楽しく」ということがテーマになっていて、これは本当に大切なことだと思ふ。1年や2年であれば気合で何とかなるが、長くなると「楽しい」というのが徐々に効いてくるので、「楽しさ」というのも大切だと前面に出たことは、長くやっていくのだという思いがある、ということだろう。

B班も非常に熱い議論だったと思ふ。とても良かったと思つたのは、段階的発展である。いきなりゴールがあるのではなく、そこに行くための踊り場がかなり具体的に考えられていたのが素晴らしい。長い時間を意識してのものだと思ふ。階段の一段は20cmくらいのものだから上がろうという気になるが、階段の一段が1mあったら誰も上がろうとはしない。それと同じで、結局行くところが一緒でも途中の段階をたくさん設定して、できる範囲でステップアップしていこうというのは、長くやればやるほど徐々に効いてくるものである。コウゾの話も出て、木なのでそうであるが、長い目でという意識があったからこそ木の話も出たのではないかと。

C班も熱い議論だったが、具体的なものがたくさん出てきたということと、単に人が来るということではなく、ちゃんと先のことも考えて、そこに根を下ろしてという意識が見られたということもとても良かったと思つた。

○各班共通だが、長期で話すことは本当に骨が折れることであるが、色々なものが今まで希望が見えなかったもののなかから見えてくることがある。特に10年クラスで考えると、「つなぎ」というも

のにすごく意味が出てくる。最終目標ではないが、当面のつなぎとしてこれをつないでいこうということである。それもなく、ただ来年までもたせるということを延々とやるというのは、援軍が来るかわからない中で籠城戦をやっているものなので、本当に心が折れると思う。10年後のビジョンがきちんとあると、それに向けての時間稼ぎ、援軍を待っていると考えると、色々なものに深い意味が出てくると思う。極端なことを言うと、集落営農がゴールでなくてよいと思う。まずは集落営農でつないで、集落営農を10年か20年やる中で本当に集落を託せる2人の勇者を見つける。集落のことを考えてくれる若い3人とか5人とかを見つけるための集落営農はつなぎだという発想があってもよい。色々なものが浮かび上がってくると思う。

○今日は皆さんが10年という心が折れる話にチャレンジされて、このような素晴らしいビジョンが出てきたということに感動した。

主催者まとめ

○今年度は2月23日（日）にもう1回開催し、今日出された計画案を少しまとめて、伊折区の行動計画の第1案として、来年度からやっていくことを具体的にまとめていきたい。（※2月23日（日）の回は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。）

今日の議論は栃倉に集中していたので、今年度まとめる行動計画は栃倉の棚田に集中した計画になるかと思うが、引き続き他の土地のことも考えていく必要も出てくる。

来年以降、国交省もできる限りこのワークショップを継続するつもりではいるので、他のところも含めて2月以降も議論していければよいと思う。引き続きよろしくお願ひしたい。

<第6回>

■会議名 いおりのみらいワークショップ

■日時 2021年3月13日（土）13時30分～16時00分

■場所 伊折区太田公民館 + オンライン（Zoom）

■主催 地元有志（呼びかけ人代表：新井守光氏、久保田清隆氏）

■出席者 地区内外の一般参加者：9名 ※：オンライン参加

アドバイザー：林准教授※（金沢大学）

サポーター

国土交通省：山本専門調査官※、谷垣専門調査官※、神山係長※、山之上係長※、小田桐企画専門官※

中条支所：大日方補佐、住民自治協議会：大日方事務局長、KRC 小林

報道：4名（うち1名はオンラインでの傍聴）

■次第

1 開会

2 主催者あいさつ及び本日の趣旨説明

3 『いおりの地域づくりみらい戦略（仮称）』
の案について

4 ご参加の皆さんからの感想

5 林先生からの講評

6 国土交通省からの一言

7 今後の予定

8 閉会



■会議概要（会議の主な記録）

開 会

○（呼びかけ人代表）2年以上に渡ってワークショップを開催していただいていたが、今回が最終回ということで、第6回を迎えたということだが、それなりの地域の成果も見えてきたと思う。会議のなかで話を進めていきたいと思っているが、いずれにしても地域の住民が改めて伊折という地域を考える機会をいただいたかと思う。お酒を飲みながら少し話をするようなことは度々あったが、地域のことを皆でまじめに考える会というのはなかなかなかったので、その機会をいただけてありがたく思っている。今回はコロナ禍ということで、今までお世話になった国土交通省の皆さん、林先生もオンラインで参加していただいている。いままでお世話になった方に感謝したい。本日は成果発表や、これからさらにどう進めていくかということも話題に出てくるかと思うが、よろしくお願ひしたいと思う。

主催者あいさつ及び本日の趣旨説明

○（呼びかけ人代表）お忙しいなか、お集まりいただきありがとうございます。

平成30年1月から国交省の声掛けで計5回のワークショップを通じて将来の地域のあり方を議論してきた。正直にいうと、私は地域の高齢化が進んでいることや人口減少が止まらない状況で悲観的な未来しか思いつかず、なるべく考えないようにしていたが、同じような考え方をしていた方も多いのではないかと思う。

そんななかで、ワークショップというのは現実を直視するという辛い面もあったが、その反面、地域が持っている資源や宝を見つけることができたと思う。このままいくと私たちが暮らしている地域はどうかというなかで、現在のままの未来と、理想とする未来を描いてみた際に、私たちは何を大事にし、守り、次世代に引き継いでいくためにどのような行動が有効なのかを5回に渡って議論し、その内容を計画素案として示したものが配布した資料となっている。今回はこの計画素案をもとに検討をしていただき、「いおり地域づくりみらい戦略」としてまとめたいと考えている。計画が制定できるよう、皆さん忌憚のない話し合いをお願いしたいと思う。代表としてのあいさつとさせていただきます。



『いおりの地域づくりみらい戦略（仮称）』の案について

（1）これまでのふりかえり

国土交通省から、戦略案を用いてこれまでの経過及びとりまとめの概略の説明。

（2）戦略案の内容確認と意見交換

○（呼びかけ人代表）議論に入る前に、私の独りよがりの思いになるかもしれないが、ワークショップが始まってからずっと考えていたことを話させていただきたいと思う。まず景観という話が目的として挙がっているので、伊折の景観というものについて述べてみたいと思う。伊折の景観というのは昭和30年代を境に大きく変わっていると思う。昭和30年以前だ

が、この地区は弘化4年、約180年前の善光寺地震の際に壊滅的な被害を受けている。その後、今の集落が作り直されてきたという経過がある。そのなかでの農地というのは、見た通りでご存じかと思うが、急傾斜な場所にあり、しかもほとんどが畑である。水田は谷沿いの水がかかる場所に設けられているというのが全体の配置の条件である。

8ページをご覧いただくと、その辺がよくわかるかと思うが、水色または黄色で塗られている部分が現在耕作がされている農地、畑である。緑の網掛けになっている部分が現在山林になっている場所である。それに対して、(赤色で塗られている部分及び)現在の図で色が塗られていない場所、薄緑色にも見えるが、この場所は休耕地または耕作放棄地である。その他、太田と書かれている一角や、小手屋と書かれている一角も元は畑であったが現在は山林になっている。そのような関係で、現在は自然林や人工林を含めて山林がとても増えているということ、また耕作放棄地の草地、荒地といったものもとても増えてきている状況である。昔は何を耕作していたかということだが、昭和30年頃までは麦と大豆の二毛作であった。まず秋に麦を蒔き、5月に麦の畝間に大豆を蒔く、6月に麦を収穫し、秋に大豆を収穫してまた麦を蒔くという繰り返しになる。水田はその空きの間で作っていたと思う。その他、麻など色々があるがこちらについては省略させていただく。

景色とすると、6月の収穫直前というのは黄色一色となり、黄金色の素晴らしい景色が広がっていたというのが私達の記憶として残っている。もう1つ大きな点としては、各家庭に馬がいたことである。現在は土間がある家庭は少なくなったが、土間の隣が馬屋(厩)になっていた。衛生的には問題があるが、人間と馬が同居しているような形であった。主に馬を飼っていた理由としては、1つは生産として、田んぼや畑を起こす、代掻きをする、農作物の運搬という点であった。もう1つは堆肥の生産である。昔は化学肥料がなかったので堆肥も貴重な肥料であったためその生産を行っていた。もう1つは馬が稼いでくれたということである。この辺では貸し馬というが、農繁期でこちらの手が空いている際に、富山県や善光寺平に農耕馬として馬を貸し出していた。これで馬が人間に代わって出稼ぎをして貴重な現金収入を得てくれていた。このようなこともあり、馬が非常に大事にされていたという経過がある。これが江戸末期から昭和30年頃まで続いたということで、いわゆる原風景というものになるかと思う。現在の景観としては、昭和40年頃から変化があって現在の景観になってきた。まず農地だが、高度成長期である昭和40年前後から工場または土木作業等に従事する方が増え、条件の悪い農地の耕作をやめてスギの植林が始まった。そして条件のよいところで兼業農家をしていた。水田は多くの人が作り続けていたが、高齢化が進行するなかで段々と遠い農地から耕作をやめていったという経過がある。現在耕作がされているのは栃倉の周辺、田沢沖の周辺、小手屋と高福寺の一部、各集落の周辺となっている。また、住宅については、先ほども話したとおり、善光寺地震の際に壊滅的な被害を受けてしまったため、その後に現在の姿が形成されている。その後、高度成長期に茅葺屋根からトタン屋根に改修された。ただ、建て替えを行う人はこの地区ではあまりいなかったため、住宅の配置と建物の雰囲気は昔のまま残っている。

また、山林について、高度成長期に植えたスギが成長し、現在約50年程になろうかと思うが、間伐等の手入れが必要な時期になっている。このまま放置しておくとうまい材が生まれず、二束三文になってしまうと思うが、ここで手入れを行うことで良材が生産できる重要な時期ではないかと思う。雑木林については、プロパングスが普及したことによって伐採されなくなり、大木になって残っている。こちら町材として現在需要が出てきている。

① 地域づくりの目的について

- （呼びかけ人代表） そのようななかで私が考える現在の伊折の資産というのが3つあり、1つは栃倉、田沢沖の農地の主に水田である。2つ目は森林、特にスギ林である。これは今手を入れることで非常に価値が上がるのではないかと思う。3つ目は漠然とはしているが伊折の景観である。これは伊折に住む人であれば皆に共通する話題かと思うが、1つは中条を代表する景観である。特に栃倉の棚田というのは写真で色々な場所で紹介されており、長野駅にも貼り出されたことがあると記憶している。また、この景観があることで移住してきた方もいらっしゃるし、移住を希望している方もいらっしゃるということで、この景観が移住の選択肢の重要な要素となっているのではないかと思う。景観を維持するためには条件が必要となるが、耕作を続けるということが最低条件になろうかと思う。また、森林も景観の一部であるということも合わせて、この2つは大きな要素になってくるのではないかと思っている。その他の先ほどの話にあったいくつかの提案については今後順次検討していきたいと思っている。

② 地域づくりの取組方針について

- （呼びかけ人代表） 続いて取り組み方針についてだが、前段の私の思いを踏まえて検討をしていただきたい。現在残されている資源というのは、先人たちが守り、私たちが引き継ぐものである。特に土地、建物とういうのは、相続によって子どもが引き継ぐということをふまえないといけない。将来避けては通れない問題になるかと思うのでよろしくお願ひしたいと思う。

③ 地域全体の取組内容

i) 農地関係（栃倉の棚田）の集落営農の取組

地域全体の取組内容のうち、取組目標を明確にして、行動計画表として10年間の取組内容を項目ごとに整理し、着手時期や関係主体等を整理した栃倉の棚田をみんなで守り継ぐ集落営農の取組について、現状（今年度の経過）の報告をしていただき、続けて、取組の意図や将来区構想について補足していただいた。

- 今回ワークショップを行ってきた結果の成果として大きかったと思うこととして、栃倉の棚田で中山間地域等直接支払制度の取組が始まったことがある。8ページの地図の黄色の部分で、下のほうは田沢沖で今までやってきてくださった場所であるが、上の栃倉の部分や太田や清水の集落の中の畑の部分と合わせて中山間地域等直接支払制度として、グループ名は伊折の棚田を守る会という名前で会を設立し、参加者は13名、



540アールほどの面積となっており、皆で守っていかなければならないからやってみようということで始まった。去年は申請から慌ただしく始まったが、1週間ほど前に総会を行い、改めて5年間は皆で頑張るって維持していこうということになった。さらに総会の席でも、面積を増やしていきたいという意見も出てきており、今荒れてしまっている田んぼを今年は加えていきたいということや、畑も白地になっているものを青地に変えて増やしていきたいというような非常に前向

きな話を行うことができた。おかげ様で次から次へとつながっていく要素ができたのではないかと思います。私たちの親の世代も中山間地域等直接支払制度の関係に取り組んでいたようであるが、その際は7名の参加で栃倉の棚田の一部であったと思うので、今回は大面積も大幅に増え、場所も拡大して広がったということによかったと思う。未来につながる1つの新しい取り組みができあがったのではないかという気持ちはある。ワークショップという形でやってきたおかげではないかと思う。若い世代も集まってきており、完全に世代交代をしたなかで始まった事業であるということで、ありがたく思っている。

○①について、項目としては挙がっているが検討はされていない項目であることは多分にあるかと思うが、私も10年ほど中山間地域等直接支払制度に関わっているため、その経験もふまえながら話をさせていただきたいと思う。①のイについて、イの鳥獣被害対策として、田沢沖に関しては共同で有害鳥獣防止のための電柵を張っている。これは春の4月頃に皆で電柵を張って、11月の下旬に撤去を行っている。雪があるので1年中というわけにはいかないの撤去は行っている。また、4月頃には側溝の泥上げ等の整備をしたり、農道や水路、周辺の緩衝帯の草刈りなどを共同作業として年に3、4回皆でやっている状態である。この共同作業をすることによって、もう少し皆で続けていこうかといったような気持ちができあがるという面があるかと思う。このような形で有害鳥獣については実施をしている。ウの農業機械の共同購入については、私たちは各自で持っている機械で耕作をしている。一番問題となっているのが稲の収穫であり、刈り取りまでは何とかできるが、ほとんどの場合で行っていることから、刈った後に天気が悪いと脱穀をすることができない。私のように専業で地元にいる者はよいが、通いで耕作をされている方はなかなか脱穀ができずいぶん遅れてしまったということもあり、お勤めの関係で休みの日に仕事ができないという問題が出てきている。そこで乾燥機を入れてみてはどうかという提案を行い、2021年度に購入する方向で検討をしている。そうすると刈って1週間後には脱穀ということが可能となるので、非常に計画的な仕事を行うことができ、通いで農業をする方にもやりやすくなるのではないかと思う。

→一同異議なし（賛同）。

ii) 栃倉の棚田の集落営農以外で今後検討する取組

栃倉の棚田の集落営農以外で今後検討する取組に関しては、以下2つのテーマで、それぞれ関係者から話題提供をしていただいた後、テーマごとに、また全体を通じて、その他戦略案に例示した内容をふまえて意見交換を行った。

<話題提供1>：森林関係の取組

民間の林業会社に勤務する地域住民から森林に関する取組について話題提供をしていただいた。続けて、長野市森林農地整備課長（地域住民）から、**森林の整備や維持管理に関する市の取組・支援内容**について、資料を用いて説明していただいた。

【森林に関する取組について（地域の森林や木材の価値等）】

○私はこの地域に関わることが3つあり、1つ目は伊折に住む住民ということである。2012年にこちらに引っ越してきた。2つ目はIターンの移住者であり初めての移住としてこちらに引っ越してきたということである。3つ目は林業の従事者ということである。長野県に引っ越してきてから13年林業の仕事に携わっている。ワークショップについては第1回しか参加できていなかったが、最終的なまとめの際に山について話をしてほしいということで参加させていただいた。



私は普段は長野県の北アルプス地域という大町市や白馬村や池田町のほうに林業会社の母体があり、そちらのほうで主に森林整備を行っている。25人程度の仲間と、北安曇地域で3、4か所、年間で30～50haを搬出間伐として森林整備を行っている。伊折地区においても3年前から森林整備の取組を始めており、令和元年に8ページの図の左上に高福寺という寺があるが、こちらの上のほうで広葉樹の林の皆伐事業を行った。目的としては、薪材を伐出して森林の更新を図るというものである。令和2年から令和3年には、不動滝の林道近くのスギ林において、13haの搬出間伐を行った。こちらについては、スギ材を用材として70t搬出し、130tを燃料材として搬出し、合計300tほどのスギ材の利活用を目指して搬出間伐を行った。令和元年から令和3年とそのような取組を実施してきており、今後は太田や小手屋の周りにスギ林が広がっているが、そちらについての間伐の計画を順次進めていきたいと考えている。来年度に清水の集落の後ろに9haほどのスギの植林があるが、こちらも災害を防止するという目的で間伐を進めていこうと考えている。

○スギ材に関しては正直市場としては安く、用材として使用する方は少ないということで、現時点ではスギは用材としての販売はしにくい。燃料材としては地球規模の話になるが、在外が頻発してくるようになっており、環境省からの指針で言われているのが、2100年までに年の平均気温が5度上がる、長野県においても真夏日が3倍に増え、気温が40度になると言われている。それはこの10年の間に何も対処をしないとそういったことになってしまうということで、この10年で森林で用材を生産するという目的でなく、環境林として防災の目的に方向転換をしようとして行政では考えている。来年度から環境に資する間伐を目的とした山づくりを進めていこうという動きはある。

【森林の整備や維持管理に関する市の取組・支援内容】

○（長野市森林農地整備課長（地域住民）より、森林経営管理制度等の行政の取組の説明）

＜話題提供2＞：宅地（空き家）関係の取組

中条地区住民自治協議会の大日方事務局長から、宅地（空き家）関係の取組として、「集落再熱プロジェクト」やその他の動向について話題提供をしていただいた。その後、移住者である住民二人からそれぞれ関連するお話をいただいた。

【集落再熱プロジェクト等について】

○皆さん大変ご苦労様です。WEB で参加されている方もありがとうございます。ただいまの話にあったように、私が空き家対策として携わった内容をお知らせしたいと思う。集落再熱プロジェクトというものを1年ほど前に立ち上げた。このプロジェクトもコロナ禍でうまく回りだしてはいない。伊折地区を含め中条にも空き家がたくさんあるというのが現状である。段々と集落で夜に電気が付かなくなってしまうような住宅が増えてくると、集落そのものの元気もなくなってしまうということで、ここに何とか1件でも多くの明かりを灯すことで集落が熱を帯びていく、再熱していくのではないかとということではじめたプロジェクトである。

この伊折地区でいうと、この数年でも何件か移住をされてきた方がいるし、この地区以外でも中条地区のなかで移住をされてきた方で、栃倉の棚田での中山間地域等直接支払制度に参加していただいている方もいる。移住を考えているという方のなかでよく話に出てくるのは景観についてである。伊折の景観を皆で守っていくということも関連してくるが、アルプスが見えるといったことや、昔ながらの原風景に憧れるという方もいる。また、自分で米を作るなど農業をやってみたいという方の問い合わせが非常に多い。実際に住んでみてはどうかということになると、居住に至るには非常に手間暇がかかる。すぐに住み始めることができる住宅というのは空き家のなかにはほとんどないということもある。最近話をしているなかでは、いわゆるお助け隊というものを考えており、移住をされる、移住を考えている方の手伝いをして、住宅を片付けるとか住むのに適した改修を行う際に、お金をかければできる時代ではあるが、できるだけこちらから積極的に関わり、手伝いをさせていただくことで、住み始める前から仲間意識をできればよいということでお助け隊のようなものを発足したく準備を進めている段階である。

もう一点として、この地区にはご存じの通り旧御山里小学校の跡地がある。その後の変遷としては色々な経過があるものの、現在は誰も使っていない状態で段々と壊れてきてしまっている状況ではあるが、あのような建物を望んでいる方もいるというのが事実である。この頃それを見てみたい、活用したいという芸術家の団体の方に声をかけていただいたという動きもある。そのまま置いておいてしまうとただ朽ち果ててしまっていく状況なので、そういったところをぜひ活用させていただいて、少しでもこの地域に明かりが灯るようにしたいと考えている。これには地元の皆さんの協力も必要であり、長野市の協力も必要となる。長野市には空き家バンクという制度があり、いくらかでも補助があるので、そういった制度も活用しながら、少しでもここに多くの方が住んでもらえるような形になればよいということで日々活動をしていきたいと思っているので、また声掛けをさせていただいた際には協力していただきたい。農地に関しても、田んぼを作るのは初めてという方も多いので、教えていただくというような協力もお願いしたい。

【移住者からの発言】

○具体的にどうということではないが、ここに書かれているものが皆で一生懸命に取り組み、いつ来ても地域の人が外に出て耕作をしていたり、景観を見に来た際に手入れをされている森林があり、見た目にもとても気持ちのよい環境であるということが実現すればそれが移住者にしてみれば大きな魅力になると思う。空き家も色々な方が住んでいて、ということになればよい。

○1月に移住してきて2か月ほどしか経っていないが、実は協力隊として移住してくる前に、お試しということで中条地区を回らせていただいた。やはりこの伊折地区は棚田の景観が印象に残っており、この地区の財産ではないかと思っている。ぜひともこの景観を維持できるようにやっていけたらと思っている。

④ 取組を支えるルール

必要に応じて戦略案に盛り込むことを念頭に、これまで十分には議論されてこなかった地域のルールについて、論点を国土交通省から説明いただき、その説明をふまえて、ルールの内容や必要性について全体で意見交換を行った。

○資料に掲げられている5項目はよいかと思うが、これを文字にするというのはどうかというところがある。文字にするものなのか、そうではなく阿吽の呼吸でやっていくもののほうがよい気がする。

○今まで行ってきた土地の管理ができなくなった場合にどうするかについては、森林はともかく、耕作をしている農地に関しては中山間地域等直接支払制度でグループになっている人がもし作れなくなった場合は、そこでおそらく話がでて、皆で代わりに作ろうとか何とかしようという話にはなると思う。このグループの中ではそういった話し合いには自然になるかと思う。

○中山間地域等直接支払制度の範囲がこれから広がっていけば、益々自然に皆の共同体制が出来上がってくるかと思う。しかし、森林というのは正直な話自分の土地も分かっておらず、親からも教わっていないうちに外に出ることもできないような状態になってしまっているの、よろしくお願ひしたい。

○私も森林の所有が多いほうではないが、これまで見ている限りでは、手入れをしないと山がどんどん荒れて行ってしまう。せつかくの山がこのままでは、杉は安いというなかでありながらも価値がないものになってしまうのは惜しいと思う。市の制度等で間伐等の手を入れていただけるのであれば、どんどんと推進していったほうがよいかと思う。境界に関して、中条は国土調査が終了しているの、基準点さえあればかなり正確な状態で復元はできると思う。範囲さえ決まって集団での間伐ということになれば、少し手間はかかるが、ある程度の特定は難しくなく可能ではないかと思う。

○この辺りの沢筋の水源というのは、虫倉山に降った雨がしみ込んで湧き出しているの、水源として非常に重要な山であると思う。ここもほとんどが民有林であり、個人の所有となっているが、ここが変に大規模開発等で特定の人に抑えられるというのは私達としては不安な状態である。ここに関してはお金にもならないし、林道も整備されていないので木の搬出もしようがないという部分もあるが、できれば現状のまま維持できるのが一番ありがたい。特に水資源の問題はかなり世界的な問題になっているということなので、その辺りの意識として、しっかりと守るということは必要ではないかと思う。

○この地図の上のほうにも森林は続いているが、まず重点的に整備をしなければいけないのは集落の周りで、水の関係で直接森林が崩れた場合に影響を受ける地域と、獣害の関係で人との緩衝帯となるべき境目を優先的に整備しなければいけないと思っている。

○特に明文化しなくてもよい気はする。少なくとも一回は皆で話し合う機会をつくるというのはよいと思う。

○文化はしなくてもよいかと思うが、移住者の方に事前にお知らせしておくべきことはないかという点については、地域に入ってきてくれた方と、どこまでというのは難しいかもしれないが、こういったことはあるとか、こういったことはして欲しいということは、強制的ではなく皆でこのようにやっていくから一緒にお願いと、そちらの意見としてはどうかなど、事前に話し合うことで、お互いにそこに居てよかったとか、あの人が来てくれてよかったというような地域づくりが大事だと思う。

○移住者から見ると、中条という広い地域があって、その中に御山里という地区があり、そのなかに伊折地区があるかと思うが、伊折地区の特定の地域にこういったルールがあるというのは事前に移住者に知らせるべきではないかと思う。年3回の道路脇の掃除や草刈り等があることが分かった上で移住してもらうという形が、外から来る人にとっては親切であり、後から知るよりはよいかと思う。

(移住してきて、後から知ったのか、お試して知っていたのか)

○草刈り等があるということは知っていたが、いつやるのかという情報は直前に知らされたということはあった。

○私はここに来てから大分経っているので慣れたが、ここに書いてあることはそこまでおかしなことが書いてあるわけではないと思う。しかし、他所から来た人はずっとここに住んでいる人と感覚が違うということが大いにあると思うので、最初にここはこういう地域であるということが分かっていたほうが入りやすいと思う。

○最低限これくらいのは分かっていたほうがよいかと思うが、これを区長なのか会長なのか分からないが、どういった形で皆に分かっていたかということがある。あまり堅苦しくなく、この中からまたケースバイケースの話もたくさん出てくると思う。移住者が来たからこういったルールがあるということではなく、来る人も来る人なりにある程度は考えていくものだと思うので、あまり堅くせずに柔らかく伝えていただければよいのではないかと思う。

○移住者の方に対して、地区でのルールのようなものはある程度伝えている。実際にやってみると、言葉で聞くのとでは大分雰囲気も違うと思うし、こんなはずではなかったと思われる方もいるとは思うが、直接あの時こういったではないかというように言われたことはない。先ほどの話にもあったように、柔らかくじわじわと進めていければよいと思う。移住者の方も、特に伊折地区に来た方では、余所者というように見られると思って来たら、ようこそいらっし

やいましたというようにとても歓待を受けて驚いていた方もいるくらいなので、ありのままにやっていたら間違いはないかと思っている。

○今までの話にあったなかで、文章にしてきっちりと固めてしまうと堅苦しくなってしまうし、それに縛られるのは嫌だと思う。そうはいても、どこかで申し合わせのようなもので、このようなことを皆で守っていきましょうというような軽い縛りの文章はいるのではないかと思う。ルールという形でなくても、申し合わせでもよいし、もう少し表現を柔らかくしたなかで、箇条書きみたいなものでもよいので作っておいたほうがよいのではないかと思う。新しく入ってきた方もそうだが、ここに居る方についても、特に2番目の引っ越して出て行かれる方に関しては、かなり高齢でここに自力では住めないから引っ越すというような方が大半だと思うので、そういった際には出て行くので後はお願いとといったようなことを伝えていただければ周りが認識できるし、黙って出て行かれてしまうとその後が困ってしまう。住宅のその後の管理についても、放っておいてしまうとタヌキやハクビシンが住み着くなど色々な支障が出てしまうので、そういったことを含めて、草刈りくらいの管理は家族等でできるのか、それとも全然手をかけられないということもあると思うので、ちょっとした申し合わせのようなものは表現を変えて作ったほうがよいと思う。

○（国土交通省）阿吽の呼吸や分かっている範囲でやればよいという意見と、外から来る人の立場としては事前に分かっていたほうがよいという意見の両方がある中で、ルールという言葉がきついということであれば、申し合わせという形で書ける部分は文字にしたほうがよいかと思う。例に書いてあるような内容で、これくらいであれば書けるかという部分があれば、今回の有志の案という形にしてはどうかと思った。

○入りやすいということであればそれでもよいかと思う。あとは伝え方を工夫するというのではないか。

→「ルール」としては示さず、暗黙の了解にしておいたほうがよいという意見もあったが、論点として提示された内容（ルールの例）はいずれも明示的に共有しておくべきこと（必要なこと）だという認識では一致し、「申し合わせ事項」などに表現を改めて、戦略案に盛り込むことで一同合意。

⑤ 実施体制について

呼びかけ人代表から、取組の実施体制についての説明・提案をいただいた。

○（呼びかけ人代表）今回ある程度の形のものができると思う。そのなかで、これで終わりにするのは意味がなく、継続することが大事だということで、今後につなげていくためにはどうすればよいかということで、皆さんに意見を伺いながら話をしてきた。区でやるということになると、区長や役員が毎年変わってしまうこともあり継続性に問題があるというなかで、棚田に関連する集落営農の組織を中核にしていくのが最も継続していきやすいと考えて体制案を作成した。栃倉の伊折の棚田を守る会や田沢沖耕作組合はそれぞれで構成員を持っており、年に

1度の総会を開かなければいけないということもあると思うので、そちらを中心にして会議を持ち、そこに住民や地区外の方に参加していただくようにし、緩い組織ではあるが、そのなかで確認をしていき、ある程度方向性が見えたところで地区の総会を開き皆さんに了承をとっていくというように主導していったらどうかと思っている。時期としては、収穫を終えた時期に収穫祭のような形にして合同で一杯飲む会があり、その場で皆さんに少し話をさせていただいたり、文章で確認をしていただければどうかと思う。話し合いの内容については一番下にも記載してあるように、地域や土地の利用・管理に関する情報の集約と共有として、例にあるように管理が難しくなった土地や困るような設備が計画されているといった情報や、地域づくりの取組として現在どの程度進んでいるかということについて。また、棚田については動いているが、それ以外にも今後取り組むということであればその進捗状況等の確認や把握も必要になるかと思う。また、行動計画表の改定や、その他具体的に何かあれば改定をしていくという形で、ここに示しているような内容でいかがか。主とすると栃倉及び田沢沖の集落営農組織を中核として、最低年1回、話題があれば数回でも構わないが、そこで一旦確認をとり、区へあげていくという形でいかがか。

○せっかく今まで話し合ってきたことなので、ぜひ活かしていければよいと思う。今の話にもあったように、農地を活かす形での取り組み体制はできあがっているのだから、それを活かしていきたい。また、森林に詳しい方はいなかったのだから、今まで森林のことは分からずにいたし、これから知りたいことはたくさんある。環境に森林がどのように関わっているかということ、二酸化炭素を吸って酸素を出してくれている程度のことは分かるが、どのように守れば温暖化防止になるかといった情報や、杉材はいつ頃値が上がって来そうかといった、色々な知らないことがたくさんあるので、その点もふまえた勉強会を開きつつ、地域の衆で一杯飲みながら楽しくやりたいということは心にはあるが、段々終わっていくとは思っているので、そういった機会も作りながら楽しくやっていくのが一番よいと思っている。この地域はルールや規則といった堅苦しいことが大嫌いなので、縛られるのではなく、自分たちからやりたい、やってみたいと思えるようなことをやっていければ一番よいかと思う。

→中山間地域等直接支払制度に基づく集落協定参加者を核にして、次年度以降も年に1回は、地域づくりに関する話し合いの場を設け、地域内外から思いを共有する人々を集めて、戦略案に示した取組の実践状況の共有や見直しや新たな取組内容の具体化、戦略案の見直しその他地域についての話し合いを継続していくことについて、一同同意。

参加者からの感想

参加者から一人ずつ、本日のワークショップまたはこれまでのワークショップの取組について、感想をいただいた。

○国交省の皆さんを始めとして、それぞれの立場でご協力いただいた会長さん、地域の皆さんに感謝を述べたいと思う。私はかなり高齢ということもあり、今回で2回目の参加だったと思うが、非常に素晴らしい計画ができて、これがずっと進めていければよいと思う。誰かの話にもあったが、時代と自分の年齢には勝てないということで、この計画を進めていくうえで現在の人の考えはよいか

と思うが、10年間の計画となっているので、今いる人も10年経てば10歳の年をとる。その間にこの計画を絶やさないように、いかに伊折の未来を創るために継続していくのが一番大事だと思う。もう一点として、会長の話にもあったように、区の体制は変わってしまうのでよいと思うが、区との連携は密に行っていただきたい。また、もう少しこの会に参加していただける方をなんとか増やして進めていただければ一番よいと思う。最後に、本日まとまった計画を総会に発表できればよいと思うし、区民の7割、8割以上が集まっている機会に伊折区全体のなかで話していただければありがたいと思う。

○やはり、区全体の人がこういった取り組みをしているということが分かっていなければ、ここにきた人が分かっていてもどうかと思うので、区全体の人が分かっているような取組をしていただきたい。棚田も大事だが、桜や高福寺などもあるので、その点も皆でできればよいと思う。皆年を取ってくるのでどれくらいできるかは分からないが、元気でいるうちはやっていきたいと思っている。



○私も出席者が少ないと思うので、たくさんの方が来て話し合えればよいと思った。私はこの会に出席する以外には協力をと特にしていないので、もし協力できることでお誘いいただければ協力したいと思っている。皆で伊折を盛り上げていきましょう。

○いおりのみらいということでこのワークショップを開いていただいたが、始めは若い人達がかかり居たが、2回か3回になるにつれて段々と数が少なくなっていった。始めは興味本位で参加していたが、途中で脱落したというか、伊折の未来を考えている若者もいるとは思うが、どうして途中で少なくなってしまったのは考えても分からない。始め出てきてつまらなくなってしまったのか、話の内容が分からなかったのか。来た頃は皆が意見を出したりしていたが、長続きしない状況になってしまっている。今日も地元の方は数えるほどしか来ていないが、始めの頃はこの倍の人数は来ていた。その辺りを何とかしないことには未来はないと思う。

○全6回のうちの第6回に初めて参加ということで、どういった前提のなかで話をされていたのか、どういった方向に持っていきたいのかということが分からないなかであった。私は中条の中の宮という場所に住んでおり、伊折区とは離れた場所に住んでいるが、隊期が3年間ということで、そのなかで中条での定住を目指しているため、ぜひとも住みたくなるような伊折区であって欲しい、棚田の景観とともにそうあって欲しいと思っている。

○最初の1回しか参加できていなかったが、私は職業柄ということもあるし、ここに住む住民としても、この地域の山に深くこれからも関わっていこうと思っている。森林に関しては1年や2年の話ではなく、10年、30年、50年というスパンで関わっていかなければいけないものだと思っている。森林に関わることでこれからも景観を守っていききたいと思っているので、よろしく願いたい。

○これまで会議を重ねていくなかで、農地、森林、景観、その他があったが、農地については2つの守っていく団体ができ、森林は詳しい方が居て、これでばっちりではないかと思う。あとはいかに皆を巻き込んでいくかが課題としてあるかと思うので、その辺りを3名がリーダーシップを取ってやっていただければありがたいと思う。

林先生からの講評

大した貢献ができず恐縮である。複数年にまたがるような非常に長いワークショップであったが、その間に非常に刺激的な瞬間を目撃でき、大変うれしく思っている。ありがとうございます。今回のワークショップというのはなかなか厳しいものがあったと思う。通常のワークショップではとにかく明るい内容を考えるというパターンが多いが、厳しい現実を直視しようという視点が最初から最後まであり、そのなかで色々な動きが出てきているということで、素晴らしいワークショップであったと思う。

本日最後の話題にルールをどうしていくかということがあったが、そこは一番重要なことだと思っている。ルールというよりはガイドラインというような表現のほうがよいと思っているが、この点に関しては今回で決めるというよりも、バージョンアップをしながら、時間をかけて話し合っていくことが大切だと思う。時間をかけて話し合うプロセスそのものとして、私たちが本当に大切にしたいのは何だったのかというところを議論のなかで炙り出していくことに意味がある。結果として出てきた文言よりも、そのプロセスのほうが大切であるとも思う。ルールというどうしても縛るというイメージが強くなってしまうということも意見のなかにもあったが、縛るという感じではなく、もっと自由に行動するために最低限のところは押さえておくという意味で考えてもらえればよいかと思う。決して、縛って押さえつけるようなものではなく、さらに自由に発展していくための礎として位置付けていただければよいと思っている。

時間もなかであまり多くのことは申し上げられないが、全体を通して勢いを感じている。これからもどういった形になるか分からないが、機会があればまたお会いさせていただければと思う。

国土交通省からのひと言

国土交通省からひと言（参加者の皆さんへの御礼、今回のワークショップを通じて生まれた新たな取組が動き出したこと、とりまとめた戦略内容の周知の依頼など）

今後の予定

本日検討した戦略案の今後の扱いについて説明。

○（呼びかけ人代表）私のほうから今後の当面の進め方について提案したいと思う。まず、この案については、ご参加いただいた有志でまとめた内容となるので、伊折地区の共有の案というわけにはいかないと思う。したがって、今月末の総会の際にこのような形でまとめたということを紹介し、その場でこういう計画があるので皆さんに承知していただき、今後これに沿って進めていってはどうかという了解を取ったなかで案を外し、正式な「いおりの地域づくりみらい戦略」として成立させていただきたいと思っている。また、先ほどのお話にもあったように、共有のルールとして、こ

の名前が申し合せになるのかガイドラインになるかは分からないが、こちらのまとめ。また、最後の実施体制のまとめについては、呼びかけ人代表に一任していただき、まとめさせていただいて、提示をさせていただく形でお願いしたいと思う。もう一点、総会が終わってこの計画がまとまった段階で、4月頃になると思うが、まとまったものを全戸配布したいと思っている。総会の場で全戸配布をするということもお約束しながら、総会の了解を取っていきたいと考えている。

→説明いただいた以下2点について、一同拍手で了承。総会報告後（4月中）に、戦略（計画書）を全戸に配布予定であることを確認。

- ①本日の意見を計画書に反映したうえで「案」をとり、3月の総会に報告させていただくこと。
- ②意見の反映のさせ方については、呼びかけ人代表に一任していただくこと。

閉 会

○（呼びかけ人代表）閉会ということだが、ここからがスタートということで、これからも伊折の住民の皆が自分たちで楽しんでいけるような、わくわくするようなことをやっていきたいと思う。周りの皆がそれを見て仲間になってみたいと思えるようなことをやってみたいと思う。国土交通省を始めとして前から関わっていただいた皆様、先生含めてこれからも関わっていただきたいということで応援していただきありがたく思っている。私たちもその気持ちを裏切らないように、皆で楽しみながらやっていきたいと思っているので、これからも応援をお願いしたい。本日は難しい状況のなかでうまく進行をしていただきありがとうございます。それではこれをもって、本日のワークショップを閉じさせていただきます。長時間にわたってありがとうございました。